

檜崎勤宛十一谷義三郎書簡について

——一九二九年春、「原稿の書けない作家」が送った手紙——

加藤 禎 行

一、
本稿では、山口県立大学附属郷土文学資料センターが所蔵する檜崎勤宛十一谷義三郎書簡五通を紹介する。これらの書簡は、地域にゆかりのある文学者関係資料として、センターによって収集されたものである。

檜崎勤（一九〇一〈明治34〉年〜一九七八〈昭和53〉年）は、山口県萩市出身の新興芸術派の作家で、『神聖な裸婦』（一九三〇〈昭和5〉年四月、新潮社）、『相川マユミといふ女』（一九三〇〈昭和5〉年一〇月、新潮社）などの創作集を発表しており、そしてまた雑誌『新潮』の編集に携わった編集者としても、文学史にその名を留めている。その文壇回想録『作家の舞台裏 一編集者のみた昭和文壇史』（一九七〇〈昭和45〉年一月、読売新聞社）は、昭和文学史の一コマを記録した資料としても、しばしば言及される一冊である。

書簡の差出人である十一谷義三郎（一八九七〈明治30〉年〜一九三七〈昭和12〉年）は、新感覚派の文芸雑誌『文藝時代』の創刊当初から同人として創作活動を展開し、また「唐人お吉」（『中央公論』一九二八〈昭和3〉年一月）などの小説で知られる、大正末期から昭和戦前期の小説家だ。本稿で採り上げる十一谷義三郎書簡は、十一谷義三郎が『新潮』編集者の檜崎勤に送ったもので、昭和三年一月から昭和四年四月までの期間に書かれた書簡である。

それでは、この時期の十一谷義三郎は、どのような執筆状況にあったのだろうか。必ずしもすべての著述活動を網羅した一覧ではないが、「昭和二年十一月より同三年十月まで」（『凡例』）を扱った文芸家協会編『文芸年鑑 昭和四年版』（一九二九〈昭和4〉年一月、新潮社）、および、「昭和三年十一月より同四年十月まで」（『凡例』）を扱った文芸家協会編『文芸年鑑 昭和五年版』

（一九三〇〈昭和5〉年三月、新潮社）が掲載した、十一谷義三郎の「執筆目録」を参照しながら、その執筆状況を踏まえておきたい。

| | | | |
|----|-----------|-------|-------|
| 小説 | 鼻緒作りの兄と弟 | 太陽 | 十一月 |
| 同 | 燈音 | 同 | 一月／二月 |
| 小説 | 灯と唾 | 中央公論 | 二月 |
| 同 | 街の犬—— | 女性 | 四月 |
| 同 | 風に帽子が—— | 文章倶楽部 | 六月 |
| 同 | 仕立屋マリ子の半生 | 中央公論 | 七月 |
| 同 | あの道この道 | 文藝春秋 | 同 |
| 評論 | 人間雑評 | 文藝春秋 | 二月 |
| 同 | 文藝時評 | 新潮 | 九月 |
| 雑 | 愛書つれづれ | 同 | 十一月 |
| 同 | 太陽の休刊など | 読売新聞 | 二月 |

文芸家協会編『文芸年鑑 昭和四年版』
（一九二九〈昭和4〉年一月、新潮社）

「私が本年発表した創作について——四十二作家の感想——」（『新潮』一九二八〈昭和3〉年一二月号）には、十一谷義三郎の「目標だけは」と題されたコメントが掲載されている。ここで十一谷は、「燈音」「灯と唾」「街の犬」「仕立屋マリ子の半生」「あの道この道」「唐人お吉」の六作を掲げたうえで、以下のような反省の弁を述べている。

六作を通じて反省されることは、精力不足の一点です。一作ごとに打ち込んでいく野心が、却つて僕自身を苛責しました。生理的に不健康の所為か、天分の薄い所為か、いつも頭が先へ走つて、ペンは鈍重で、実に苦しい思ひをつげました。此の苦しさが無くなつた時、初めて、僕の欠点の「硬さ」が無くなるのだらうと思つてゐます。／足は重く、腰はクダケ勝ちですが、たゞ常に目標だけは、高いところに置きたい、それが僕の覚悟です。その覚悟の苦しさを、作はもとより、身辺日常生活にも痛感したのが今年でした。／褒められても、貶されても、批評は、みんなこの僕の苦しさを鞭打しました。／これは恐らく、僕だけに限つた経験では無いでせうが、僕にはこの苦痛が大きく見えて仕方がない。所詮は荆棘の路です——

十一谷への批評もひとつだけ確認しておこう。この十一谷のコメントが寄せられた号には勝本清一郎「一九二八年の小説」『新潮』一九二八（昭和3）年一二月）も掲載されているが、一年間の創作壇を振り返りながら勝本は、犬養健と並べながら十一谷に声援を送っている。

十一谷義三郎氏も亦非常な努力を示した。「仕立屋マリ子の半生」（中央公論）、「灯と唾」（同）、「あの道この道」（文藝春秋）——どれも作者の身辺的経験範囲を越えて、客観的題材をこなさうとしたものだ。「唐人お吉」はその一層大規模の所産である。（中略）氏は明かに新自然主義者として、過去の自然主義の正当な理論的伝統の上に立つた。尤も犬養氏も新自然主義者であつたと云へる。しかし再び何が氏等の態度の弱点かと云へば、時代や環境の認識について、それらの底にある唯物的な決定的動因としての歴史的経済機構の把握にまで突き詰める事をしない点である。時代や環境の力を「気紛れ」なものと見て満足して、せつかくの認識的努力を途中で遊ばせてしまふ中途半端さにある。殊に「唐人お吉」に於ける十一谷氏にあつては、その時代的知識が、日本画家の帝展製作に於ける調度や衣類に関する表面的な故実知識ぐらゐにしるかきされてゐない。十一谷氏の自由主義的な時代認識の眼にもつと徹底と深さ

と強さがあれ！　そしてそれに適はしい表現力、弾力的迫力があれ！

そして本稿で採り上げる書簡のうち、最も早い時期に書かれたものは、一九二八（昭和3）年一月二三日の日付を持つが、この一九二八（昭和3）年一月以降の十一谷の執筆状況については以下の通りであつた。

| | | | |
|----|--------|--------|-------|
| 小説 | 唐人お吉 | 中央公論 | 十一月 |
| 同 | 白粉花の窓 | 若草 | 同 |
| 同 | 統唐人お吉 | 中央公論 | 十二月 |
| 同 | 古臭い感傷 | 若草 | 三月 |
| 同 | 時の敗者 | 東京朝日新聞 | 六月／十月 |
| 小説 | 街の斧博士 | 中央公論 | 七月 |
| 同 | 一つ手前 | 若草 | 八月 |
| 評論 | 傾向に面して | 読売新聞 | 五月 |

文芸家協会編『文芸年鑑 昭和五年版』
（一九三〇（昭和5）年三月、新潮社）

一九二八（昭和3）年十一月、十二月と十一谷義三郎は『中央公論』に、代表作となる「唐人お吉」「統唐人お吉」を発表し、雑誌『若草』への小説掲載を挟みながら、翌一九二九（昭和4）年六月二十八日からは、『東京朝日新聞』夕刊紙上に「時の敗者 唐人お吉」（一〇月五日まで）の連載を開始している。十一谷義三郎は、すでに充分に新進作家から中堅作家になりつつあつたとみてよい。だから『新潮』編集者榎崎勤が十一谷に、昭和四年一月号の新春を飾る創作欄に執筆依頼することは、決して意外なことではなかつたことになる。

二、

以下に、書簡本文を掲げながら紹介していく。なお翻刻に際しては、仮名遣いはそのまま旧仮名遣いとし、旧字体は固有名詞を除いて、新字体に改めた。また、写真版を本稿と同時に掲げるので、改行位置については特に明示しないこととした。

【書簡1】 封筒オモテ 市内牛込矢来町三 新潮社 檜崎勤様 速達

封筒ウラ 本郷曙町二 十一谷義三郎

消印 駒込311221 前89

前略御免下さい。昨日速達いたゞきました後過日來の疲労やら憂鬱やら一時に來たものらしく熱心地で倒れてしまひました。今夜の会は楽しみにしてゐましたがどうもとても覚束なく存じます。我慢が出来るやうな是非出たく存じますが勝手(うわごと)を喋りちらしたりしてはいけません。黙り切りで熱の辛抱も苦しい次第ですからお許し願ひたく考へます。尚新年号の作は既にかゝりましたが、此の調子ではとても期限までに満足な出來栄になりさうにありません。新潮の此の作は今の小生として飽くまで快心の作にしたく、枚数も六十枚を多少越える予定でかゝつてゐます。重々勝手に申しわけありませんが色々御諒察下さつて二月号へお伸ばし願ひたく存じます。合評会も新年号も、どちらも小生としては悦ばしくお引受けしたのですが、現在のこの状態では結局無理な作を作つて自分自身の苦痛を招くもとなりさうですから何卒御懇願致します。創作は、大底十二月の二十日頃に完成して御届けしたく考へます。御予定を狂はして申し訳ありません。小生も寔に残念ですが、然しからだが利きませんしやつつけ仕事は尚苦しいですから御許し下さい。そのかわり多少は自身ある作をお眼にかけたく考へます。いづれ此処三四日休養後拝眉萬々申し述べます。間際へいってゞは一層いけませんから今から一寸御断り申し上げたく、牀上に筆を走らせました。勝手は重々御詫び致します。中村さんよろしく御伝言下さい。

檜崎様

義三郎

書簡冒頭の話題として掲げられた「今夜の会」というのは、しばらくして「合評会」と言い換えられていることから判るようには、雑誌『新潮』の合評会のこと。十一谷が欠席した合評会は、『新潮』一九二九(昭和4)年一月号に掲載された「當來の文学と要望する文学——第六十六回新潮合評会」で、出席者としては黒田礼二、新居格、片岡鉄兵、勝本清一郎、大宅壮一、浅原六朗、横光利一、平林初之輔、中村武羅夫ら、九名の文学者の名前が掲げられている。

そして十一谷は、一月号の原稿依頼を二月号に延ばして欲しいと檜崎に依頼し、二月二〇日前後を新しい締め切りとして、みずから提案している。ちなみに『新潮』一九二九(昭和4)年一月号の創作欄に掲載されたのは、牧野信一「熱い風」、平林たい子「非幹部派の日記」、川端康成「海山叙景詩」、浅原六朗「女群行進」、片岡鉄兵「大島争議君」、岡田三郎「三月変」の六作であった。なお、書簡末尾で名前が掲げられた「中村さん」というのは、もちろん、作家で、新潮社の編集者だった中村武羅夫と見てよい。

【書簡2】 封筒オモテ 市内牛込矢来町三 新潮社 檜崎勤様 速達

封筒ウラ 本郷曙町二 十一谷義三郎 二十一日

消印 □□31221 后23

過日は失礼致しました。原稿例によって苦心して居ります。大変勝手に申し上げにくいのですが二月号稿料のうち百円前借したいのですが何とかお取計願ひたく存じます。原稿が出來てからと思ひましたがそれは少々手許が困りますからお願ひ致します。原稿は二つとも間違ひなく完成致しますから。新年号皆断わつたので少し苦しい処へ作の為金を使ふので誠に相済まぬお願ひです。何卒よろしく御取計ひ下さい。明日お昼過ぎに使ひか小生直接伺ひますから。

檜崎様

義三郎

この書簡は、十一谷がみずから設定した二月二〇日から一日が経過した二二日の消印を持つ。二月号掲載の小説は未完成ながら、十一谷は、原稿料の前借りを檜崎に依頼している。「二つとも」とある第二の原稿についての詳細は不明だが、次の一月一日付書簡で「文章倶楽部もやっぱり不義理しさうです」と言及されるように、新潮社の投書雑誌『文章倶楽部』から依頼された別の原稿のことを指しているようだ。書簡における「新年号皆断わつた」という十一谷の弁明が事実かどうかは判断しがたい。とはいえ、前掲の文芸家協会編『文芸年鑑 昭和五年版』の記録に従えば、一九二九(昭和4)年の新春、十一谷の創作が文壇に提供されて活字となった形跡が見受けられないのは確かだ。

なお、「作の為金を使ふ」という十一谷の釈明は、前掲の勝本清一郎の批評の言葉を借りて言うならば、「作者の身辺的経験範囲を越えて、客観的題材をこなさうとした」、小説「唐人お吉」(一九二八(昭和3)年一月、二月『中央公論』)に見受けられるように、幕末期、明治初期の資料や文献の蒐集と精読を通じて、その小説世界の構築を試みるといった、十一谷の創作手法の転換期に当たっていたからだとも、考えることができるだろうか。

実際、豊島与志雄の追悼文「十一谷義三郎を語る」(『改造』一九三七(昭和12)年五月)は、当時の十一谷の博搜について、以下のように述べている。

十一谷君は仕事に対して入念だった。『唐人お吉』以後歴史物に手をつけるやうになつてからは、文字の駆使、表現技法などに、独特の精緻な風格を増してきて、「読者の眼を廻させるスタイルだ」と或る人に云はせるに至つたが、そればかりでなく、材料の蒐集研究に一方ならぬ苦心を費したものだつた。あちこちの古い記録を見て歩いたのは固より、どこで手に入れたか、古い反故のいの一杯つまつてる藪籠を幾つか持つてゐた。古証文、手紙の断片、種々の受取書、いろんな日付や品物の覚え書、さうしたつまらない反故のいの中から、作中人物の実生活を探り出さうとしてゐた。恐らく、『唐人お吉』に関するものが最も多かつたらう。砂中に黄金の粒を探る者のような眼付で、十一谷君は古い反故のいをかきまはしたことであらう。

【書簡3】 封筒オモテ 市内牛込矢来町三 新潮社 榊崎勤様 速達 お詫状

封筒ウラ 本郷曙町二 十一谷義三郎

消印 駒込4.11.1 后12

原稿がおくられて申訳ございません。ほつてゐる訳ではなく苦心を重ねてゐるのです。こんどの一作は相当自信のある力作です。どうもおくられて申訳ありませんが作は多少見られるのにしますから何卒いましばらくと申しても、五日のお約束がこんなになつてゐるので恐らく二月の間には合ひますまい。僕も生活もあるのではやく脱稿したいと焦つて居りますが無理は出来ず寔に御迷惑で済まない次第です。然し間に合せを発表したくないので自重して居ります。何卒御諒察下さい。まだ四五日は

か、りさうなので心苦しいです。何卒勝手をお許し下さい。文章倶楽部もやっぱり不義理しさうです。これも一緒にお届けしたいです。御覽の通りほかは何処へも何一つ書いてない始末です。その締約束だけは随分沢山あるのです勝手を書いて失礼です。御立腹にならずに何卒 呉々も御許し下さい。 出来次第お届け致します

榊崎様

義三郎

この書簡によれば、十一谷の原稿締め切りは、榊崎との調整で、正月三日の明けた一月五日になつていたようだ。書簡は、それより一週間近く遅れた一月二日の消印を持つ。十一谷は、前便で原稿料の前借りまで依頼したというのに、「五日のお約束がこんなになつてゐるので恐らく二月の間には合ひますまい」と『新潮』二月号への掲載が現実的に困難であることを謝罪している。もちろん『文章倶楽部』を含め、「他は何処へも何一つ書いてない」という十一谷の言い訳が、実際、その通りであることはすでに述べたとおりである。

【書簡4】 封筒オモテ 市内牛込矢来町三 新潮社 榊崎勤様 速達

封筒ウラ 本郷あけぼの町二 十一谷義三郎

消印 駒込4.3.10 前9.10

駄めです苦しいです最後に近づきつゝ、完成出来ません。昼間はのつびきならぬ客でそれも近頃は多い時は十二三人入れ代り立ち代り責められ夜は徹宵この作にかゝりました。少し肥つてゐたのがまたもとの状態です。金も入用です。仕事は是非せねばならぬのです。それが出来ません。去年の作は皆不満です。今年こそ満足な作を上げたいと意気込んで居りますが頭の中で出来てゐるやうに書いて居りません。こんなことでは発表出来ません。今年の第一作はと決心してかゝつて居ります。自信がなければ発表しても不得心です。厄介な自分がどうにもなりません。苦しい許りです。先月のを放棄して面白い作にかゝりました。頭の中では随分光つてゐるつもりです。それが此処へ来てまたもの足りなくなりました。内容からもいろいろ反響を買ふべきものと自信して居りますが又他の作家とは少し違ふつもりですがそれ丈骨も折れ努力の不足が痛感され

ます。これではこのまゝでは去年の悔を重ねます。雑誌の御都合には極度の不義理です。殆ど顔向けもありません。然しこれでは今の僕として発表すべきではないと信じも一度面を被ってお詫び致します。此の作はきつと好いものにして僕の今年の第一作として世に問ふつもりです。現代には迂遠な僕を憐れんで下さい。以上のほか申しあげる元氣もなくありません。中村さんにもお眼にかゝつてお詫び申します。

十日払暁

義三郎

檜崎様

この書簡は、これまでの書簡が便箋にペン書きであったのに対し、原稿用紙に墨書で、三月一〇日の消印を持つ。日程的に見れば、二月末日頃と推測される『新潮』四月号の締め切りを、はるかに過ぎた頃合いの書簡だろうか。

檜崎勤の文壇回想録『作家の舞台裏』（一九七〇〔昭和45〕年一月、読売新聞社）には、「十一谷義三郎の苦吟」という一節が掲載されている。

十一谷義三郎の本郷弥生町の家は、同棲している年上の女の持ち家だ、という風評であった。廊下といわず、床がよく抜けないものだとおもわれるほど和書と洋書が積み重ねられてあった。そのころ、十一谷は、一日にバットを百数十本吸うという噂であったが、それは噂ではなく、その指から煙草を放したことがなかった。紫檀の机の上には、買置きバットが積みかさねられてあった。／「原稿の書けない作家」それは、戦前の作家のだれかれに当てはまることであるが、締切り日までに（あるいは締切り前に）寄稿してくれる作家は、正宗白鳥と、室生犀星の二人であった。とくに「原稿の書けない作家」は、芥川龍之介、十一谷義三郎、川端康成氏が極北的存在であった。十一谷の、書けないことの断りかたには、ときに、それが「狂言」ではないかとおもったりしたものであった。

そして檜崎勤は、この一節の直後に、前掲した三月一〇日の書簡を全文引用し、それに続けて、「原稿紙に墨筆で認められているが、この十一谷の苦悩の

声に、わたくしの心はもろくも崩れるのであった。」と回想している。

檜崎勤が、十一谷義三郎の記憶を、十一谷が愛した煙草の銘柄ゴールデン・バットとともに思い起こしているのは、回想執筆のために再び取り出した十一谷書簡の原稿用紙中央部の柱に、蝙蝠の意匠が印刷されているのを目にしていたからに相違ない。それは、先に見た豊島与志雄の追悼文「十一谷義三郎を語る」（『改造』一九三七〔昭和12〕年五月）でも、「十一谷君の愛煙は世に有名である。必ずバットに限るのであつて、それを一日に少くとも十五箱は吸つてゐた。遂には、バットの模様の二匹の蝙蝠をつけた原稿用紙を、わざわざ拵へさしたほどだつた。」と言及される蝙蝠の意匠だつた。

十一谷の小説を一月号に掲載することを見送つて、二月号への掲載を模索していた檜崎勤は、「横光利一・十一谷義三郎氏の印象——新作家の人と芸術(5)」（『新潮』一九二九〔昭和4〕年二月）を企画して、十一谷の原稿を待っていた。この企画には、川端康成「横光と十一谷」、中河与二「横光例話集」、片岡鉄兵「横光・十一谷」、新居格「十一谷君の素描」という四点の文章が収められていることが確認できる。『新潮』二月号巻末の「記者便り」は、以下のように結ばれている。「▼新年号の後をうけて、二月号は見劣りし勝ちなものになるのだが、記者は、その点を特に留意して、本号を作つた。その点は十分に汲んでいたゞけるだらう。三月号に対する準備もすでにとのつてゐる。充分に期待して頂いてもいいと思ふ。厳寒の折柄、読者諸氏並に寄稿家諸氏の健康を祈る。」

編集者檜崎勤の心がもろくも崩れてしまうという、その嘆息は、こうした地道な雑誌編集の準備を、十一谷が裏切り続けた記憶から生じているに違いない。

三、

ところで、もう一通、趣の異なる書簡が残されている。その書簡を確認して本稿を終えることとしたい。

【書簡5】 封筒オモテ 市内牛込矢来町三 新潮社 檜崎勤様 大至急

封筒ウラ 本郷曙町二 十一谷義三郎

消印 駒込445 前78

拝啓

新潮四月号所載文壇情痴集本日拝見 右に依れば小生は一生失業の憂無

き幸福なる身分の由 筆者の説に依れば火の無い処に煙は立たずとあり
 ますが如何なる火にや 小生不敏と雖いまだ女を喰ひ物にするが如きケ
 チな量見は持ち合はさず 瘦せても枯れても筆一本で立つてゐるつもり
 です 右一言御断りして置きます

榎崎勤様

義三郎

書簡の消印は、『新潮』四月号が発売されてまだ間もない四月五日。これま
 での便箋や原稿用紙からは、うって変わって用紙は和紙の巻紙で、筆記用具は
 墨筆。十一谷の感情の高揚を、文具とその筆遣いからうかがっておいてもよい。

この書簡で言及されている「文壇情痴集」は、小山田庄平「文壇情痴集」
 或は情賢集——（『新潮』一九二九（昭和4）年四月）を指す。この「文壇情痴集」
 は、一四頁に及ぶ長大な記事なのだが、その実、坪内逍遙、二葉亭四迷から昭
 和初年代に至るまで、男女の間柄をめぐる文学者たちのゴシップ記事であった。
 この記事が十一谷に言及しているのは、ほんの一節で、「しかし、何と言つて
 も女で一番得をしてゐるのは、金があつたり、家があつたり、恩給がついてゐ
 たり、い、職業を持つたりしてゐる未亡人と結婚その他の関係に入つた連中であ
 る。／＼この点からいつて高田保、宮島新三郎、秋田雨雀、十一谷義三郎、大
 関格郎等の身分は、真に羨ましい限りである。彼等は、／＼一生失業する憂がな
 く嫌な思ひまでして原稿を書かなくとも、どうにか食つて行けるのだから、こ
 れに越したことはない。」という箇所だけだった。

なお、十一谷が「筆者の説に依れば火の無い処に煙は立たずとありますが如
 何なる火にや」と憤慨しているのは、「文壇情痴集」の結びに置かれた、「以上
 でこの物語も終つた。筆者の筆がすすべりすぎて、中には意外の濡れ衣を着
 せられた人も少くないであらうが、火のない所に煙が立たず、弘法も筆の誤り
 といふことがあるから、少し位のところは大胆で見て戴きたい。」という一節
 を踏まえたものである。

この小山田庄平の手になるゴシップ記事「文壇情痴集」は、ちょっとした波
 紋を起こしていたようで、翌月の『新潮』一九二九（昭和4）年五月号のムー
 ラン・ルウジユ欄には、無署名で「文壇情痴集」余聞」という記事が掲載さ
 れている。その書き振りからは引き続き小山田庄平が、この記事を執筆してい

るようだ。話題は筆者の詮索から始まっていて、この小山田庄平なる変名を用
 いた筆者が大宅壮一だったのでないかと、もっぱら文壇から疑われているが、
 筆者は大宅壮一ではないのだと説明している。

先月の本誌に掲載された筆者の「文壇情痴集」に就て、編輯者は、方々
 で批難を蒙つて、大変弱つてゐるさうである。／＼先づ、人の顔をみれば、
 猥談がし度くなり、ヨタリ度くなる大宅壮一は、「あ、いふゴシップ的
 のものは、みな僕が書くやうに思はれて、非常に迷惑をする」と、悄気
 た風で愚痴を零してゐるところ、大宅壮一も案外肝魂の小つぽけな男で
 ある。ゴシップ・アナウンサーとして自他共に許してゐる大宅壮一よ、「文
 壇情痴集は、俺が書いたんだ」と云ひ廻つた方が、かへつてい、よ。ム
 キになつて、弁解するから、君が書いたんぢやないかと、痛くない腹ま
 で探られたり、疑はれるのだ。然し、日頃の言行から推していつて、当
 然の受難だから、あきらめることさ。

そして、諸作家の「文壇情痴集」に対する反応が紹介されていくのだが、岡
 田三郎、勝本清一郎に続くあたりで、十一谷義三郎、新居格、高田保らの反応
 が順に掲げられていく。十一谷義三郎の反応についての記述は以下の通り。

十一谷義三郎は、「新潮」の編輯者のところに、一書を飛して、「新潮四
 月号所載文壇情痴集本日拝見、右に依れば小生は一生失業の憂無き幸福
 なる身分の由、筆者の説に依れば、火の無い処へ煙は立たずとあります
 が、小生不敏と雖いまだ女を喰ひ物にするが如きケチな量見は持ち合は
 さず、瘦せても枯れても筆一本で立つてゐるつもりです。右一言お断り
 して置きます」といふのであるさうだ。／＼編輯子嘆じて曰く「十一谷氏
 の名前だけは削つておく可きだった」

とあり、先に確認した十一谷の書簡が、若干の字句の異同を含みつつも、『新潮』
 誌面に掲載されたものであったことがわかる。

「方々で批難を蒙つて、大変弱つてゐる」という編集者は、もちろん榎崎勤
 だろうし、また「十一谷氏の名前だけは削つておく可きだった」という嘆息も

また檜崎のものだったはずだ。なお、「文壇情痴集」余聞の末尾は、「闇の夜が怖いんじゃないが、筆者小山田庄平、当分山にでも籠らうか。」と結ばれており、その筆名はそのまま『新潮』紙上から影をひそめてしまう。

「駄めです苦しいです最後に近づきつ、完成出来ません」(三月一日)と懇願したその翌月、「瘦せても枯れても筆一本で立ってゐるつもりです」(四月五日)と啖呵を切ってみせる十一谷義三郎の感情の起伏には、やはり驚かされるが、一九二九(昭和4)年上半期は、十一谷にとつて寡作な半年間であった。

『アサヒグラフ』二九四号(一九二九(昭和4)年六月二六日、東京朝日新聞発行所)には、「寡作な十一谷義三郎君」というキャプションで十一谷義三郎の写真が掲載され、「一たび『唐人お吉』を発表して、十一谷義三郎の名は昭和三年度の日本文壇を風靡したよ、さすがだが本人は一向面白くもなさそうな顔付をしてゐる、でも細君の話が出るとニヤツと訳なくやに下るとこは「マコトに愉快だ」といった短い記事が添えられた。そして、この記事から二日後の一九二九(昭和4)年六月二八日、十一谷は、はじめての長篇連載小説「時の敗者 唐人お吉」の第一回を『東京朝日新聞』夕刊に掲載することになる。

なお、新潮社と十一谷義三郎との関係について言えば、翌年、十一谷は、『時の敗者/唐人お吉』(一九三〇(昭和5)年二月、新潮社)、『時の敗者/唐人お吉 続篇』(一九三〇(昭和5)年七月、新潮社)、新興芸術派叢書『キヤベツの倫理』(一九三〇(昭和5)年六月、新潮社)と、立て続けに三冊の著書を刊行しており、新潮社に対する『新潮』一九二九(昭和4)年一月号の不義理は、充分に果たされていたことが確認できる。

しかし、本稿冒頭に掲げた、「私が本年発表した創作について——四十二作家の感想——」(『新潮』一九二八(昭和3)年二月号)におけるコメントを最後に、十一谷義三郎の著述は、一九二九(昭和4)年一月以後、『新潮』誌上から確認することはできない。

附記

本稿は、二〇一二年度山口県立大学研究創作活動助成事業に採択された、「県立大学所蔵資料を中心とした郷土文学についての研究活動および教育プログラ

ムの検討」の成果の一部である。

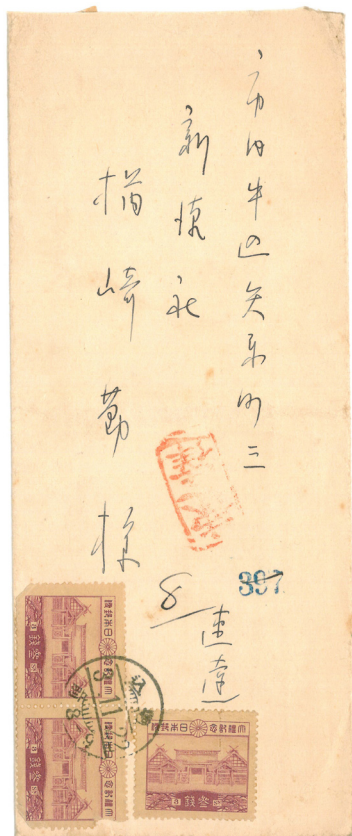
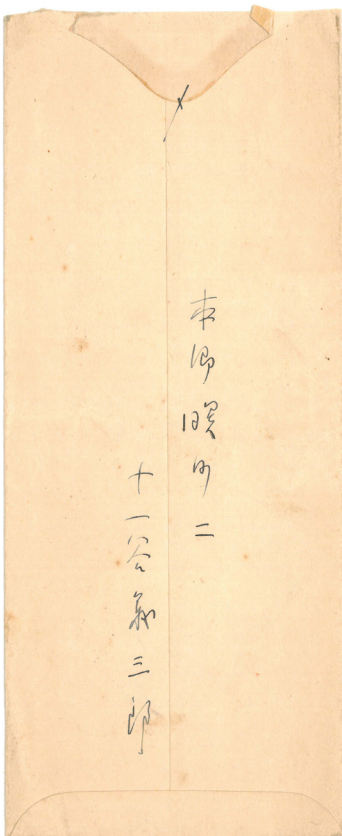
十一谷義三郎は、一九三七(昭和12)年四月二日に肺結核のため死去しており、現在では、十一谷義三郎の著作権は消滅している。また書簡4、書簡5は檜崎勤『作家の舞台裏』、雑誌『新潮』一九二九(昭和4)年五月号にそれぞれ既出している資料だが、書簡1、書簡2、書簡3は新出資料と思われる。

また十一谷義三郎御遺族の方の現在の居所について、ご存じの方がおられましたら、どうかご教示下さいますようお願い致します。

【書簡1】 封筒オモテ 市内牛込矢来町三 新潮社 檜崎勤様 速達

封筒ウラ 本郷曙町二 十一谷義三郎

寸法 封筒縦 205mm × 横 84mm 便箋縦 222mm × 横 188mm



平々とは伏し書て。至極御へき之を。この一
文。度。勝。口。申。し。出。に。い。い。り。す。か。
百。回。有。借。一。七。い。り。す。か。何。れ。か。取。中。の。五。
七。と。下。り。等。至。極。か。出。多。し。と。多。く。七。
十。と。七。の。字。許。同。く。有。り。と。多。く。い。り。す。か。
至。極。に。二。つ。と。も。分。り。を。す。と。其。の。い。り。す。か。
新。年。に。以。て。御。考。え。之。り。と。多。く。い。り。す。か。
至。極。に。使。出。は。誠。に。御。考。え。有。り。と。多。く。い。り。す。か。
何。れ。か。一。つ。と。も。分。り。を。す。と。其。の。い。り。す。か。
至。極。に。使。出。は。誠。に。御。考。え。有。り。と。多。く。い。り。す。か。
指。崎。様

至
平 啓
十一谷義三郎

至
平 啓
十一谷義三郎

平々とは伏し書て。至極御へき之を。この一
文。度。勝。口。申。し。出。に。い。い。り。す。か。
百。回。有。借。一。七。い。り。す。か。何。れ。か。取。中。の。五。
七。と。下。り。等。至。極。か。出。多。し。と。多。く。七。
十。と。七。の。字。許。同。く。有。り。と。多。く。い。り。す。か。
至。極。に。二。つ。と。も。分。り。を。す。と。其。の。い。り。す。か。
新。年。に。以。て。御。考。え。之。り。と。多。く。い。り。す。か。
至。極。に。使。出。は。誠。に。御。考。え。有。り。と。多。く。い。り。す。か。
何。れ。か。一。つ。と。も。分。り。を。す。と。其。の。い。り。す。か。
至。極。に。使。出。は。誠。に。御。考。え。有。り。と。多。く。い。り。す。か。
指。崎。様

【書簡3】 封筒オモテ 市内牛込矢来町三 新潮社 檜崎勤様 速達 お詫状
封筒ウラ 本郷曙町二 十一谷義三郎
消印 駒込4.1.11 后12
寸法 封筒縦214mm×横89mm 便箋縦222mm×横188mm

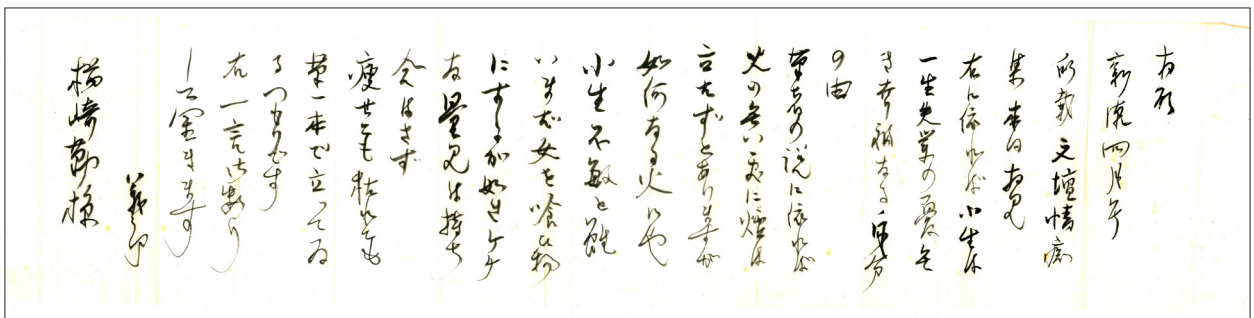
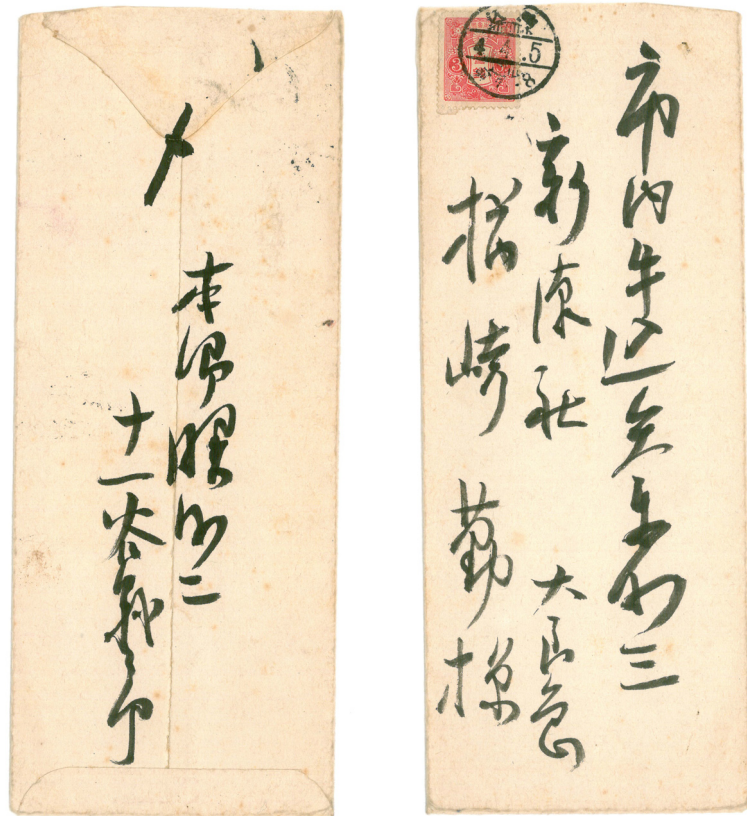
【書簡5】

封筒オモテ 市内牛込矢来町三 新潮社 梶崎勤様 大至急

封筒ウラ 本郷曙町二 十一谷義三郎

消印 駒込44.5 前78

寸法 封筒縦212mm × 横84mm 巻紙縦184mm × 横867mm



On Juuichiya Gisaburo's letters to Narasaki Tsutomu — sent by a novelist who couldn't complete a manuscript in spring 1929 —

KATO Yoshiyuki

This article introduces five letters of Juuichiya Gisaburo addressed to Narasaki Tsutomu.

Narasaki Tsutomu (1901-1978) was an editor of the literary magazine *Shinco* in 1926-1945, and Juuichiya

Gisaburo (1897-1937) was a writer known for his masterpiece *TOJIN OKICHI*.

Though the investigation of these letters, some of the new facts on Juuichiya Gisaburo's biography were made clear.

